磯原天妃社と富士山興法寺船霊軸
ー船霊信仰を追ってー

石塚勝治

船霊様との出合い

消えそうな思い出がある。専漁の集落だった前羽村町屋（現・小田原市前川）に生まれた私がまだ小学生の昭和25年頃、近所の垣根に廃船の船板が使ってあった。彫り込んだ四角の穴に寛永通宝が重ねて埋め込まれているのを見つけた。

昭和49（1974）年、大阪に創設される国立民族学博物館の依頼で、前川浜に伝わる船霊様の製作を、当地でただ一人になった船大工・小田原市羽根尾の黒柳国太郎さんにお願いした。前川浜では船霊様を準備し、御霊入れまで船大工が行う。船霊様は依頼する船主さえも見るのを戒め、御霊入れの儀式でも、船に乗るのは船大工のみ、他の人は船を囲んで下にいた。ましてや、船大工の家で行われる二体の人形や付属の品々について実見した人はいない。船大工も他の人に儀式の内容について語りたがらず、秘儀として親方から伝えられている。

使用目的を理解された黒柳さんの好意で、一部の秘儀を除き眼の前で接した。余談になるが、船霊様を納めた厨子は、中を見るものではないと黒柳さんの主張でボンドを塗った木片で密封された。

戦後30年を経た当時、すでに船霊様にかかわる儀式も、いろいろな方法に変化していた。地方によって、船大工、寺の僧侶、神社の神主に依頼したり、大型漁業の盛んな宮城県石巻港の例では、船具店で雛人形のようにセットで販売していた所もある。船大工が準備をし、秘儀を行う前川浜は古式を保っていたといえる。平成10年５月、鳥羽の海の博物館を見学したが、10組近くの船霊様のうち、色彩やかな色紙を使い、目鼻立ちも人形のプロが作ったと思われるものがあった。

昭和20年から30年にかけて水揚げの多かった時代を過ぎ、昭和40年以降新造船もない。漁師も５指にも満たぬ今、黒柳さんも亡くなり、前川浜では船霊様の儀式を伝承する人はいない。

船霊様は新造船に祀る。他に不漁が続き、船主が嫌気がさすとゲン直しに船霊様を替えたことがあった。また、不漁が続くと、船板を洗う泥箒で船霊様を祀ってある所を叩き「船霊さん、漁をさせてくれ」と頼んだ。

船霊様を依頼する船主は、オサンゴウ（散米）、お神酒、掛魚に赤い魚（タイ、ホウボウ、キンメダイなど）を２尾、お白粉、紅、鏡、真田紐、麻苧、穴あき銭12枚と礼金を持参する。

黒柳さんは半紙をノミで短辺を２等分、長辺を４等分して８枚に分ける。８等分された半紙1枚で人形を２体つくる。形は流し雛に似る。ハサミで切るのは、切れるという言葉を忌み、ノミで突き分ける。ツクは運がツクに通じる。１体には真田紐、もう１体は麻苧を帯に見立てて締める。他に真田紐と麻苧を10㎝くらいに２本ずつ切り、ひとつずつ結び目が中心にくるように結ぶ。結び方は一重結び。枕だという。真田紐と麻苧が２個ずつ。計4個。

穴あき銭は12枚。船霊十二社へのお賽銭だという。船霊十二社については前川浜の漁師からは採集されておらず、黒柳さんから初めて聞いた。

サイコロを２個、木で作る。一辺が１㎝くらいの小さなもの。市販のサイコロとは目のつけ方が異なるので船大工が作る。２個を平行に並べて、「イチ(1)天地ロク(6)、表ミ(3)合せ、ともシ(4)合せ、中んつな荷物にニ(2)合せ、おもかじグ(5)っつり、とりかじグ(5)っつり」となる。グはサイコロ賭博の「５・２の半」を「グニの半」というのと同様。

歌は多分にこじつけとなっているが、廻船が荷を満載した祝い歌ともとれる。同例の歌は、本州の南から北まで多少異なるところがあっても、多数収集されている。町屋の石塚与八さんから教えていただいたものと同じところからも、広く知られていたと思う。この歌が廻船と漁船両方に伝わることに注意したい。

船が遭難し、方向を失い進路を決めかねた時にこのサイコロを振って針路を決めたというが、目と方向の関係は伝えられていない。

紙で作られた人形は、丸めた紙を半紙で包み墨で目鼻口が描かれ頭となる。人が化粧をするように、黒柳さんは鏡を見せながら紅とお白粉で化粧をする。人形一対は正面合わせにして麻苧でしばる。東北のある地方では女神の着物の裾を広げ、男神を包むようにして納めるという。また人形は

1体だけのところもある。
その後の儀式は、船大工の秘儀で見学できなかった。船霊祭文を唱えるところもあるが不明である。
秘儀が終ると、博物館展示のため、幅10cm、高さ20cm、厚さ5cmくらいの木片の一部を長方形に彫り込んだ厨子に納め、木でフタをされていた。
前川浜では直接、船に埋め込むが、厨子に入れ船に打ちつけることも戦後は少例ながらあったという。木造船から鉄、プラスチック、グラスファイバーが多用される時代になって船に埋め込む例はなくなった。
前川浜の漁業は、木造の和船で終止符をうったといえる。船幅4尺から1間の船が多く、箱舟には船霊様を入れぬ船が多かった。船の胴を横に渡された2本の梁。三間っ子船では2番のトリカジ（左舷の前から2番目の梁）の船板、あるいは帆柱近くの板に穴をあけ、人形一対、銭12枚、サイコロ、枕4個、昭和30年以降は少なくなったが女性の髪の毛、五穀を入れ、板で密封する。

船霊様は女性神？

船霊様については、住吉大明神、綿津見神、猿田彦など男性神が『古事記』などに見られるというが、海を生活の糧とする人の伝承では女性神が多い。
黒柳国太郎さんは大正2年生まれ。お父さんの平治郎さん（明治15年生まれ）について船大工の修業をされた。平治郎さんは二宮町梅沢の大島市五郎さんのもとで修業した。船大工は造船技術とともに船霊様の秘儀を親方から弟子に伝承する。前川浜の漁師が嫌がる魔性のものハモノは、時には現実的にマグロを食い荒すシャチを指すこともあるが、姿の見えぬハモノを船大工は見ることができるという。
和船の時代に使用した梶には、梶棒をさしこむ穴が上下ならんで2つあるが、下の穴から船大工がのぞくとハモノの正体が見えるという。呪術的な面も身につけた集団であった。
梅沢は弟橘媛を祀ってある吾妻山のふもとに位置する。そのためか船霊様は走水で夫の乗った船を助けるために入水した弟橘媛だと平治郎さんは子供の国太郎さんに伝えたという。船霊様の人形は前川浜では2体。1体は海難に遭った時に乗組員に代わって犠牲になり、もう1体が船を守るという。1体は弟橘媛としても、もう1体の名前がでない。また、使用する船材は寺領地のものは良いが、神社の森、祠のある山のものは使わぬよう父・市五郎さんから伝えられた。
前川浜では、昭和20年代以降、女性の髪の毛や五穀は、船主からの申し出がなければ入れなくなった。髪の毛は地方によって結婚前の女性、それも初潮前の子供、七・五・三にあたる子供。船主や船大工の妻とバラバラである。前川浜の人形2体や化粧、2組計4個の枕は婚礼を思わす。
家大工が棟上げの日に、米俵を5俵、踏み俵といって贈られたことがあった。ヌサ飾りもある。ヌサ飾りにつけるのも船霊様の供えものと似る。ヌサ飾りには、大工棟梁の妻や娘の悲劇がからみつくが、双方に家や船に対する共通した思考がうかがえる。

磯原天妃社を訪ねて

相模湾と同じ黒潮に洗われる茨城県北茨城市磯原に、二宮町と同じ弟橘媛を祀る弟橘媛神社があるのを、宮田登氏の『歴史と民俗のあいだ』で知った。
古くには薬師如来と十二神将が祀られていたが延宝5（1677）年、中国から渡来した曹洞宗の僧・東泉心越によって道教の女神・天妃媽祖が長崎に持ち込まれた。像（伝承では絵）を水戸光圀が譲り受け、天保3（1690）年、磯原の海に面した小丘に祀られ、天妃社となった。
その後、朝日指峰と呼ばれた小丘は天妃山となった。天妃山は常磐の海に面と向くようにたち、わずか30mそこそこの小丘は、松と低木の常緑樹、下草にツワブキが自生し、真鶴半島を思わす。
天妃媽祖は宗の建立年間（960～）、福建の浜辺

天妃山を望む

に生まれ、成長するにつれていくつもの奇跡をおこした。海辺の福建の人びとは、他国と船で商いをする人が多かった。媽祖がまだ子供の頃、突然意識を失った。驚いた両親は媽祖をゆり起こした。眼を開いた媽祖は「船に乗った兄３人は助けたが、起こされて一番上の兄さんを助けることはできなかった」と話した。数日して兄弟３人は戻ってきたが、媽祖のいうように長男だけは戻らなかった。

その後、媽祖は道教の神に祀られ、海上に働く人の海難守護の神として、現在でも中国・台湾を中心に信仰されている。

天保５（1834）年、水戸学を興した水戸藩は、尊皇攘夷思想によって中国の天妃を斎昭の命により日本の神に替えられた。日本武尊を海神の怒りを鎮めるために、自らを犠牲にした弟橘媛に。天妃媽祖も弟橘媛も海難から船と人を守る船神として祀られていた。

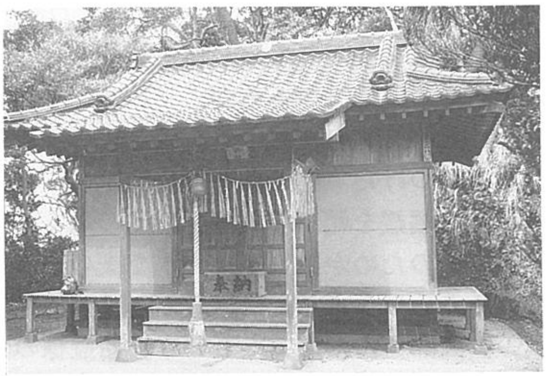
船大工の黒柳さんは「船霊さんは吾妻さん」と語られていたが、二宮と北茨木市磯原が同じ発想で結ばれていた。そして、十二神将が船霊十二社と関係があるのか。それ以上に天妃媽祖は初めて知った海難防除の神・船神だった。後述するが寄贈された船霊様の信仰軸の主神が確定できずに20年も時が流れた。仏像図鑑などにも掲載がない。天妃媽祖を知って、御影でもあれば同定できると考えたのが、磯原行きの起因となった。

天妃山は、詩人・野口雨情の生家近くにあり、小丘ながら海に面して立つ。二宮の吾妻山と同様漁師は山アテの前山に用いる。かつて夜は修験の行蔵院があって、夜は法明が灯台の代わりに、昼は旗を振って漁船に位置を示したと伝える。雨情の「磯原音頭」や他の作品にも詠まれるところからも、磯原周辺の人には親しまれているのを知った。境内には海に働く人の信仰を集める金毘羅社や、利根川流域を中心に福島にかけて漁師の憩となる大杉神社もあり、磯原漁師の信仰形態を知った。現在、土地の人も他県の人も参拝はほとんどなく、弟橘媛と天妃媽祖、雄都嘉が合祀されているが社務所もない。昔日の偲はないと近所の人に聞いた。

隣接する北茨城市大津町の大津港は、イワシ漁が盛んで漁港は茨城県でも屈指である。漁撈従事者も多いが、天妃山から港を望む佐波波地祇神社に参拝するようになった。ここも船神である。アンコウの水揚げの多い北茨城市平潟港の漁師も、天妃山から同市華川町花園の花園神社に参詣するようになった。

磯原には漁港がなく、砂浜に揚げられた船もない。年に一度の祭り以外に、天妃社を訪れるのはマレという土地の人の話が印象に残った。

興法寺船霊軸



弟橘媛神社

富士山興法寺の船霊軸

小田原市前川（町屋）の北村実さんから、代々家に伝わってきた民間信仰軸十数本を寄贈された。そのなかに船霊と明記された軸が１本あった。

前川浜で行われる船霊にかかわる祭礼は、新造時や船霊様の入れ替え以外に例は少ない。石塚与八さんが昭和50年代まで、昭和20年代は盛大にそれぞれの船で行っていた浜年始を、１船で行っていた。

元旦の早朝、麦殻を束ねた松明に火をつけ、トリカジからオモテ、オモカジ、トモを回って火で船をあぶる舟タテをする。船に松を飾り、掛魚と鏡飾を供げる。海にお神酒を捧げ、トリカジ側から船霊様にお神酒を注ぐ。踏み跡のない清浄な波打際の砂を、ヒシャクでとり、ミナオリの櫓枕（二番のトリカジ側）に、砂をひとつまみずつ２個のせる。

トリカジ（左舷）は神聖視されていたのか、船霊様は左舷に納める。魚を船にあげるのも左舷が多い。流れ仏（水死体）を船上にあげる時、泥箒で船板を叩きながら「漁をさせてくれれば揚げてやる」と問答の後に、オモカジ（右舷）から引き揚げた。

船大工が船を修理する時に、オモカジ側から乗船するのを船主にみつかるとどなられたという。トリカジ側から乗船するのが作法である。

正月３日は初船。龍宮社の見える海上で、アキノカタ（明方・恵方）に船首を向け、右回り（オセイマワリ）で３回まわって、お神酒やサンゴウ（散米）で一回に一度ずつ浄める。これはオモカジのトモ（船尾）に魔物がいるので、浄めるという。船方は船主の家に招待され小祝宴となった。船上で煮炊きする船世帯では、新米の漁師＝メーロッ衆（前櫓衆・炊事する火床は前櫓近くにある）が食事時に、まず船霊様に初穂をあげる。鍋のフタを逆にして、その上にシャモジを返さずに飯を盛る。シャモジを返さないのは、船をかえる（転覆する）のを嫌ったもので、二つに分けるのは、船霊様は２体だからという。

北村家の船霊軸は、船に飾るよりも、正月の浜年始から11日の船霊様の祝い日や、大漁の万祝いなどに飾ったというが、町屋の漁師の家に同形のものを含めて船霊軸は伝えられていない。

軸は富士山興法寺から出されたもので、唐子15人が漕ぐ宝船には、千手観音、寿老人、毘沙門天、大黒天、弁財天と、主神と思われる唐風の服をまとい、沓をはいた一面八臂の女性神が大きく描かれている。漁師が大漁を祈るエビス様は入っていない。女性神のみ大きく描かれているところから、主神の船霊様であろう。特長は密教の諸仏のように一面八臂の像であるが、弁財天や観音菩薩にみるインド風の服装と裸足のお姿ではない。一緒に描かれている唐子と同様に唐風の服で沓をはく。なによりも神の性格を表すものは、頭上に横たわった馬である。天妃媽祖が村山修験者によって密教の諸仏と合成し、変化。修験の呪術的な船神になったものであろう。

富士修験は役小角に始まると伝えられるが、平安末期に末代（まつだい）によって基がつくられた。根拠地は、村山浅間神社の神宮寺・興法寺である。修験道主導のために、明治の廃仏毀釈や修験道禁止令によって興法寺は消滅し、村山浅間神社のみ残る。北村家に伝わった船霊軸は、明治初期以前のものとなる。この軸が興法寺から直接授かったものか、村山修験者が来村の折に持参したかは不明であるが、ここでも磯原天妃と同様、修験者の影が見え隠れする。

天妃信仰は、華僑の間で多い。媽祖の絵を求めて横浜中華街の店を回ったが、その折一軒の女性店主を紹介された。平成10年５月５日、箱根町湯本の寺で媽祖祭が行われた。参詣者は中国人が多く、横浜の女性店主も参加していた。本尊は豊満な女性像。

日本では天妃信仰は九州に分布し、本州では茨城県内に磯原と他に１社、東北にもあるというがすでに船神としての信仰はうすい。磯原は羽黒山修験の勢力範囲。富士山の村山修験と交流があったとは考えられない。

民間における流行神や産業神は意外なほどに広い範囲に伝播し、そして消滅する。海上に働く人は魚を追って他所にも移る。廻船のように荷を運んで港を巡る人もいる。昭和初期まで、町職人が腕を磨く「西行」と称して他国を旅したように、前川漁師も大島や駿河湾のサクラエビ漁、東北の鮭漁にも携わった。

廻船は物も心も運ぶ。魚を追う漁師も、荷物を運ぶ船方も他国の人と接する機会が多い。船霊様をはじめ、漁撈習俗は南北に長い日本列島の九州から東北まで共通点が多い。20年ほど前、齢老いた漁師と東北の石巻へ旅行に行った。陸上の人に

は話の通じない浜言葉を混えて、小田原漁師と石巻漁師の間で通じるのに驚いたことがあった。

埼玉県の岩船地蔵信仰の痕跡を小田原市前川の常念寺の墓地で見た。羽黒山修験の湯殿山講の碑が二宮町の吾妻神社にある。海難事故防除の十一面観音・紀州青峯山正福寺の青峯山信仰を、前川漁師の聞き取りで確認した。

富士山興法寺の船霊軸は、他の場所から事例がないところから、村山修験独自のものかもしれない。仏教は中国や朝鮮半島から何度も日本に伝播された。その時点で道教の神々も日本に入る。七福神の寿老人や福禄寿、そして鍾馗も道教の神。庶民の求めに応じて修験道に、媽祖が船霊様に祀られても不思議ではない。

磯原天妃社は正式には今も弟橘媛神社だが、天妃も合祀されている。天妃社の時代、修験の行蔵院があったというが、今は社務所もない。御影は入手できず、磯原歴史民俗館にも天妃に関する資料は皆無に近く、富士山興法寺の船霊軸と比定できなかったのは心残りである。

船霊と船神

この稿では、船霊と船神に分けて考えてみた。船霊は船の霊・神にはまだ昇格しない霊としたい。日本人の精霊思想である、動物にも植物にも物にも霊は生ずる。船の物霊が船霊様か。

船神は船を守り大漁を約束する神と考えたい。金毘羅社であったり、青峯山、相模大山、地方の神々であったりする。

船大工とメーロッシュ

木造の和船全盛の時代、海運や漁船でも遠海と地先漁業では大きく異なるが、地先漁業の場合は昭和40年代まで木造船の時代が続いた。

家の建前にあたる、船底のちょうな立てから、船霊様の御霊入れ、新造船の船おろしの儀式を司どるのは船大工だった。神聖な左舷は船大工を意味するミナオリあるいはミアガリの言葉が残るように、船霊様と船大工の関係は深い。その儀式は神道よりも修験道の影響が強い。

修験道は明治以降活動を停止し、戦後復活した。現在私たちが修験者を眼にするのは、滝開きや山開きなどの観光行事のなかに組み込まれているのが多い。江戸時代末期までは、上棟式や庚申講、加持祈祷など民衆に直接関わる宗教者であった。

昭和20年前後、前川浜の定置網にマダラウミヘビが入った。マダラウミヘビを幸福を招くシャチガメと漁師に教えたのは、修験の流れを汲む行者だった。ウミヘビ信仰はすでに過去のものになっていた当時でも、行者は知っていた。船霊様に係わる一連の儀式も、明治以前には修験者が司どりそれが船大工に伝承されたとも考えられる。

前川浜には、カシキという言葉は残らないが、メーロツシュがそれにあたる。カシキもメーロッシュも少年漁師である。漁撈従事の他に炊事と神への奉仕が役務であった。前川浜では船霊様への初穂あげや、マグロの心臓を抜き、薄く切ってお神酒をかけ、集落の神々に捧げる。どこか山の猟師の山神への作法に似る。「ツヨーイコラ、〇〇さん」と祠の前で神の名を唱え、メーロッシュは祠を巡る。さながら船上に女性を乗せないかわりに、巫女の役割である。かつての少年漁師は、まだ女性を知らない年代であった。

何十例か船霊様の事例を読んだが、前川浜のように枕についての記載はない。伝えられているのは、船霊様はあちこちに動くという。前川浜の枕は、船霊様がミナオリの櫓枕に落ち着いて頂くために封入するとも考えられる。それにしても、一対の船霊様に4個の枕は多すぎる。なんとも姿のみえない船霊様である。

【註】

大杉神社は、茨城県稲敷郡桜川村阿波（あば）の大杉神社が本社といわれ、千葉・茨城・福島・宮城・岩手など、関東北部から東北にかけての太平洋沿岸の漁村に広く分布する。

漁師は不漁が続くと、前川浜ではマナオシ、地方によってはマンナオシといって、氏神などに参篭する。その時、前川浜ではすでに行っていなかったが、網の浮木を「あんば様」と呼び飾った。前川浜でも浮木はアバと呼ぶ。

あば神を、船霊様の親神とする地方は多い。

【参考文献】

- 『東北の民俗　海と川と人』国分直一・高松敬吉編　慶友社、1988年
- 『海の民俗学』牧田　茂、岩崎美術社、1982年
- 『船』須藤利一編・法政大学出版局　他

（神奈川県文化財巡回調査員）